巻頭言

「コロナ禍と web 会議と雑談と」

公益社団法人　日本防犯設備協会　常任理事
オーテック電子株式会社　代表取締役社長　上原　英明

2年超に渡るコロナ禍において、大きく進展、普及したものの一つにweb会議システムがあります。

当社においては2019年末に導入したものの、当初は皆が慣れていなかったこともあり、なかなか稼働率が上がらず、利用推進に躍起になったものでした。

ところが2020年3月頃からのコロナ感染拡大で出張がままならなくなったことにより、皆やむなく利用するようになると、ものの数ヶ月で当たり前のツールとなりました。

事実この期間のWeb会議システム市場自体の躍進は凄まじく、2023年は2019年の3倍の市場規模となると予想されているそうです。このコロナ禍2年間の世界的な経済成長の停滞を思えば、誠にもって羨ましい限りではあります。

私自身もこのシステムを、会議はもちろんお客様との面談や社員研修に利用したり、遠隔地の社員とwebランチを開催してみたり、はたまたプライベートにおいてもオンライン飲み会なるものにもチャレンジしてみました。

会議については皆様もご体験済みの通り、互いの時間の拘束を最小限に抑えられ、必要なテーマを短時間で議論、または伝達することが可能ですし、逆に、とりあえず集まって考えよう、という非効率な会議を一掃できるという副産物もあります。

研修の場面においては、web経由で可能なものなのかどうか、いささか懐疑的なところもありましたが、実施してみるとweb上ならではの利点もあり、さらには全員が一堂に会する研修を考えると、時間もコストも節約できてこれもまたなかなか効果的ということもわかってきました。

こうした具合で、web会議にも付随するツールの使い方にもそれなりに慣れてきたものの、どうしても慣れないことがあります。それは退出時のそこはかとない寂しさです。

ミーティングが終わると、「お疲れ様でしたー」の声と共に退出して行き、各自それぞれの持ち場に一瞬にして戻ります。無論これこそがオンライン会議のメリットであり、効率化といえる部分なのですが、それでも何かが足りない、と思ってしまいます。足りないもの、それはリアルの会議ではよくある、終了後の余韻や雑談です。

無駄がないというweb会議のメリット自体に物足りなさを感じているという矛盾した感覚に陥っているわけです。

かのスティーブ・ジョブズは「創造性は何気ない会話から、行きあたりばったりの議論から生まれる」などと語ったと言いますが、この雑談の有用性は少し前から注目されるようになっていました。それがこのコロナ禍において、各組織がweb会議に限らず様々な仕組みを駆使してテレワークを推進することにより、雑談の重要性が益々重要視されるようになってきたようです。

従来であれば職場で普通に行われていた仕事以外の会話＝雑談が減り、部署間の連携やチームビルディングに支障が出るといった弊害も起きてきたことがわかってきたわけです。

これに対しIT企業各社もこうした状況をカバーすべく、ビジネスチャットツールを始め、雑談の類をweb上で推進できる仕組みを次々とリリースしてきています。

言わば雑談を発生させることもビジネスとなっているわけで、学生アルバイトの時分から、「雑談をするな!」、「口ではなく手を動かせ!」と言われ続けた世代の者としては隔世の感があります。

ただそれでも、コロナ渦中の行動規制がかかる中、web会議システムをフル活用しながらも、その合間に実際に現地に赴くことができたとき、会社の仲間と歓談したり、お客様と面談すると、やはり直接顔を突き合わせることにより成り立つコミュニケーションに勝るものは見当たらない、ということを強く実感するのです。

雑談は自然発生するところに妙があり、また同じ空間を共有しているからこそ可能な意思疎通というものがあるのですね。

結局のところ、各種ITツールは効率を高める上で最高の武器であり、最大限活用するべきではありますが、だからこそそこではカバーしきれない生身の人間同士のコミュニケーションは、無くてはならないものとして重視しなければならないと尚更考えるようになったという次第です。

そうした認識こそがこのコロナ禍で得られたことなのかもしれない、とコロナの1日も早い終息を期待しつつ、今そのようなことを考えています。